

小児の発熱 に対する留意点

●指導/崎山 弘
(崎山小児科理事長)

熱を下げても病気は治らない

「熱」そのものは症状であって病気ではありません。解熱剤(げねつざい)で熱を下げることに病気を治すことは全く意味が違います。発熱している子供に解熱剤を飲ませることは、ちょうど虫歯で歯が痛い人に痛み止めを飲ませることと同じです。痛みを抑えることはできますが、虫歯が治るわけではありません。しばらくの間だけ、症状を和らげてあげるだけです。



●子供が熱を出したら…●

- ①衣服をゆるめる
- ②ウチワであおいであげる
冷房をいれる
氷枕を使う



<それでもつらそうときは>

- ③解熱剤を使う

熱の高さと病気の重さは 一致しない

熱が高くても、かぜ程度であれば何もしなくても自然に治るでしょう。熱が低くても、肺炎などの重い病気のこともあります。「熱が何度か」よりも「病気は何か」の方が大切です。まず受診して熱の原因が何かの診断を受けましょう。

熱が高くても頭は大丈夫

日射病のように体の外から熱を受けて体温が上昇する病気と違って、かぜのように自分の体が出す熱で自分の脳が壊れることはありません。意識がなくなっているような病気を除けば、あわてて熱を下げる必要はありません。

抗生剤をもらったら、 ちゃんと飲ませましょう

抗生剤は決められた投与方法を守らなければ効果は期待できません。例えば、1日3回飲む薬を1日2回しか飲まなかったとしましょう。その効果は3分の2ではなくて半分以下になると思ってください。

抗生剤は症状が治まっても途中でやめると病気が再発したり、むしろ治りにくくなってしまうこともあります。

解熱剤を使うなら アセトアミノフェンを

小児に対して安全性が確立されているものとしてアセトアミノフェンを使うことをお勧めします。手持ちのくすりがないと市販薬を購入するときもその成分をみて「アセトアミノフェン」と記載されているものを選びましょう。アスピリンなどほかの解熱剤はお勧めしません。



小児の発熱

—溶連菌感染症を中心に—

●指導/崎山 弘
(崎山小児科理事長)

発熱に対する解熱剤は根本的な治療ではない

「熱」そのものは症状であって病気ではありません。熱を下げることに病気を治すことは全く意味が違います。発熱している子どもに解熱剤を処方することは、ちょうど虫歯で歯が痛い人に痛み止めを処方することと同じです。痛みを抑えることはできますが、虫歯が治るわけではありません。しばらくの間だけ、症状を和らげてあげるだけです。

- 熱で苦しんでいる子供を少しでも楽にさせる手段としては、まず、衣服をゆるめる、ウチワであおいであげる、冷房を入れる、氷枕を使うなどの環境整備をしてみましょう。それでもつらそうなときには「解熱剤を使う」という薬物療法を選択します。
- 解熱剤が対症療法であるからには、副作用をなるべく少なくする必要があります。もし解熱剤を使うとするなら、アセトアミノフェンが安全性という視点からすれば最も適しています。剤型も散剤、坐薬、錠剤、シロップと各種そろっているので使いやすいかも問題ありません。投与量は5～10mg/kg/回を8時間以上あけて使用します。



溶連菌感染症のくすり

ペニシリン系の抗生剤が第一選択です。アレルギーなどのためにペニシリン系が使えない場合はマクロライド系の投薬が第二選択となります。

いずれにせよ、途中でやめると再発する可能性が大きいので症状が治まっても服薬をやめないことが大切です。保育園や学校に行っている子どもの場合は、食後の内服にこだわらずに、例えば、朝食のとき、学校から帰ってきたとき、寝る前など、確実に飲める時間帯を選びます。

